E.L.カルフ作『エリオピス――生き延びたメディアの娘がすべてを語る』 撮影：Pate Pesonius

［フィンランド］

先行きが見えない中、もとの日常へ

リンネア・スタラ

2022年の春に規制が緩(ゆる)むまで、フィンランドの劇場は営業停止を強いられ、公演中止を余儀なくされた。しかし、パンデミック前は毎年のべ400万人以上の観客が、演劇、舞踊、サーカスなどの舞台芸術を楽しみ、夏には国中の村という村に野外劇場が出現し、毎年約100万人の観客を動員していた。人口たった550万人の国にしては、かなりの人数と言えるだろう。

フィンランドには、フィンランド国立劇場、フィンランド国立歌劇場、フィンランド国立バレエ団の他に、国費で賄(まかな)われている劇場やダンスカンパニー、そしてサーカス団が69ある。しかし、これらはどれも国が所有して運営しているわけではない。また、教育文化省が管轄するフィンランド芸術振興センター（Arts Promotion Centre Finland、Taike）から毎年助成を受けているほぼ同数の名の通った集団に加え、登録・未登録合わせて約三百に及ぶプロの演

劇集団、フェスティバル、舞台制作会社が存在する。

フィンランドの舞台芸術は多様性に富む。それぞれが独立し、ほぼ外部の影響を受けることがない。フィンランド国立劇場で2021／22シーズンに上演された『盲点（Sokea piste）』が良い例である。2020年秋、ヘルシンキ市は市の収支額が大幅に黒字であったにもかかわらず、幼稚園や学校への助成金削減を決定した。演出家で劇作家のスザンナ・クパリネン（Susanna Kuparinen, she/her）は市の調査に乗り出し、この辛辣なドキュメンタリー演劇を創作。市議会はパンデミックの状況を利用して、助成金削減の判断をまず市民から隠そうと試み、ついには削減の必要性まで訴えるようになったが、作品の創作チームによれば、この主張は根拠が乏しいものだった。

演出家スザンナ・クパリネンらによるドキュメンタリー演劇『盲点』 撮影：Mitro Härkönen

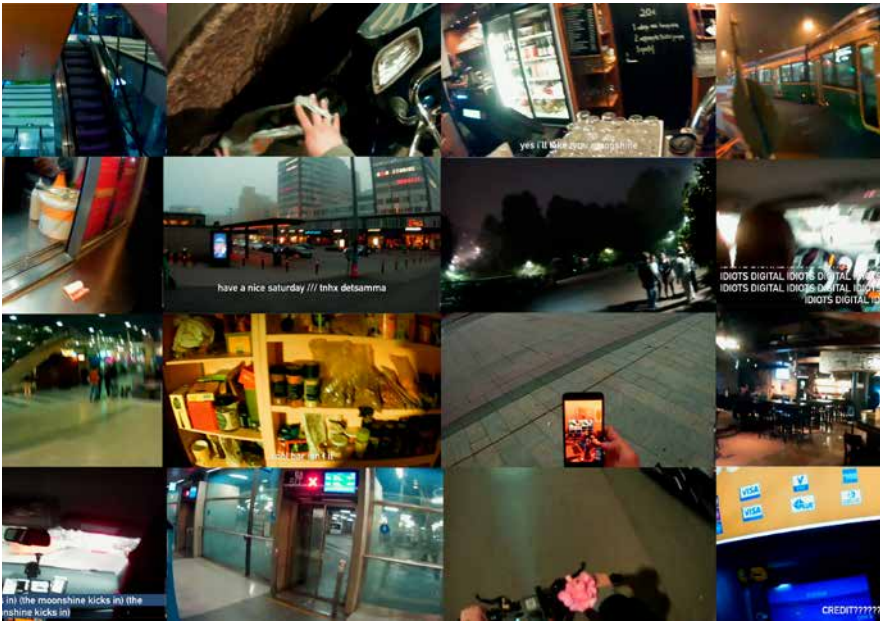
デジタル媒体の急成長

2020年の春の段階で、デジタル媒体の準備ができていた劇場はほんの一握りであったが、多くの劇場がパンデミックを機に素早くオンラインに切り替え、無料または有料で作品を配信した。その一年後、野心的な劇団は、デジタル媒体をアートとして受け入れ、本格的にその可能性を探るようになった。

この流れで、デジタル・イディオッツ（Digital Idiots）というグループが、2021年秋、オンライ

ン視聴者向けにシリーズものの『プロタゴニスト（Protagonist）』という興味深い企画を打ち出した。作品は、プロタゴニスト（主役）であるキュレーターや批評家が、隠し撮りができるスパイ眼鏡をかけて、劇場をあとにするところからはじまる。たった今観劇したのは、左翼やリベラル派が集まる観客席で居心地の悪い思いをしている人間に向けて、極右政党の魅力を説く『ロッキー！（Rocky!）』という架空の演劇作品。どのシリーズでも、プロタゴニストは街に繰り出し、隠し撮りされていることを知らない通りすがりの人に話しかけ、演劇について質問する。演劇が今日の社会に影響を及ぼしているかどうか。演劇の観客は、文化一般にふれられない人々から隔絶して、小さな殻の中に閉じこもっているだけなのではないか。

デジタル・イディオッツはライブ・パフォーマンスの可能性を広げただけでなく、言ってみれば、自宅でスクリーン越しに観劇する私たちの価値観を見事にかき乱（マインド・ファック）したのである。



オンライン視聴者向けのシリーズ作品『プロタゴニスト』 写真提供：デジタル・イディオッツ

ウクライナへの支持

2022年２月、ロシアがウクライナに侵攻し、フィンランド中を震撼させた。フィンランドは、ロシアと1340kmに渡って国境を共有している。フィンランドの劇作家であり翻訳家でもあるエリ・サロ（Elli Salo, she/her）は、ウクライナ人作家や反体制派のロシア人作家によって書

かれた日記、モノローグ、手紙を集め、ドキュメンタリー劇『建物は揺れた（Talo horjahti）』を発表。戦争が始まった当初のこと、今までの日常が一変した様子をまとめた。作品はフィンランド各地でリーディング上演され、売り上げはウクライナで活動している支援団体へ寄付された。この企画はジョン・フリードマン（John Freedman）が率いる「ワールドワイド・ウクライナ戯曲リーディングプロジェクト」（Worldwide Ukrainian Play Readings Project）の一環として行われた。

そのほかにも、ウクライナ人作家のセルヒー・ジャダン（Serhiy Zhadan, him/his）の麦を育てる農家を描いた戯曲『パンの停戦（Хлібне перемир'я）』（2021）がフィンランド国立劇場でリーディング上演され、国内の各劇場でウクライナにまつわるコンサートや、戦争に関する公開ディスカッションなども開催された。

最も忘れがたいのは、ウクライナのハルキウを拠点に活動するユース・シアター、カランブール（Kalambur）による劇だった。12歳から18歳までのメンバー16名がフィンランドに到着した2月24日、ウクライナで爆撃が始まった。メンバーは、難民センターに保護された後、演劇作品『走る（Begi）』でフィンランド国内ツアーを続行。親たちがフィンランドに彼らを迎えに来たのは、5月以降のことだった。2022年10月の時点で、そのうちの7名のメンバーがフィンランドに残っている。その他のメンバーは、世界中に散らばったままだが、そんな状況にも屈せず、カランブールはオンライン上で演劇クラスを開催し続けている。

フィンランド人劇作家の国外での活躍

ここ数年、新世代のフィンランド人劇作家のヨーロッパ各地での活躍が目立つ。もはや、フィンランドの作品だからといって、フィンランドで初演を迎えるとは限らない。例えば、E.L.カルフ（E.L.Karhu, she/her）は、ドイツの劇場から直接執筆依頼を受けている。激しく狂熱的なカルフの戯曲『エリオピス―― 生き延びたメディアの娘がすべてを語る（Eriopis: Medea's survivor daughter tells all）』は、2020年にシャウシュピール・ライプツィヒ（Schauspiel Leipzig）で初演を迎え、その後、舞台芸術批評サイト「ナハトクリティク（Nachtkritik）」で、「ドイツ、スイス、オーストリアで上演された新戯曲ベスト40」に選出された。フィンランドでの初演は、2022年の春、ヘルシンキのQ-シアター（Q-theatre）で行われた。シャウシュピール・ライプツィヒから執筆依頼を受けて創作されたカルフの最新作『兄へ（For My Brother）』は、2022年4月16日にライプツィで初演を迎えている。

カルフと同様に最近注目されているフィンランド人の劇作家・演出家に、サーラ・トゥルネン（Saara Turunen, she/her）がいる。トゥルネンが手掛けた『ノーマルの怪人（Phantom of Normality）（2016）』は、2022年の春にドイツ現地の俳優を起用し、ボーフム劇場

（Schauspielhaus Bochum）で再演されて好評を博した。この作品は三部作のひとつであり、三作目の『論理のぶどう（The Grapes of Reason）』は、2022年９月にヘルシンキで世界初演を迎えた。静かで、精密で、滑稽味のあるトゥルネンの作品は、いくつもの断片を集めた絵画のようであり、舞台上では、言葉の役割よりも音楽と視覚イメージの比重が大きくなる。

サーラ・トゥルネン作『論理のぶどう』 撮影：Pate Pesonius

劇作家ピプサ・ロンカ（Pipsa Lonka, she/her）の活動にもふれておきたい。ロンカの戯曲もトゥルネンと同様、言葉の量こそ少ないが、どの作品にも、遠くから鋭いまなざしで動物や人間を観察するナレーターがいる。ロンカの戯曲『第二の天性（Second Nature）』は、動物王国の中の人間の立ち位置を探る作品である。ロンカの視点は容赦ないが、愛情深い。2022年の秋に、アルゼンチン、ブエノスアイレスで上演された。

自由を求めて

2021年の初秋に上演された劇団「ヴィ―ルス（Viirus）」とダンス・カンパニー「ソディアック（Zodiak）」のコラボレーション企画『汗（Svett）』では、三人のパフォーマーが「舞台上で、こんなことしてもいいですか？」という質問を繰り返した。今や多くのコンテンポラリー作品が、さまざまな角度から同様の質問を投げかけている。パフォーマーたちは「抑制や偽りのない身体」を求め、ヒエラルキーや型どおりのスタイルから解放された舞台表現を探っている。『汗』は型を崩し、いわゆる「パフォーマンス」とは一線を画す。決めの部分は数カ所にとど

め、残りを即興や自由な動きで埋めている。流れが一切途切れることなく、決められた構造が有機的に発生したものにさえ見える。結果、作品は笑いに包まれたエンターテイメントと化し、型にはまらない、リラックスした空間を生みだした。

そのふた月前、パフォーマーのキッド・コッコ（Kid Kokko, they/them）とタリ・ドリス（Tari Doris, they/them）、そして照明デザイナーのメリ・エコラ（Meri Ekola, she/her）が発表した『不在－情熱（Katoaminen－Passio）』では、壊れやすい構造、トランスジェンダーとノンバイナリーな思考が探求された。儀式のような濃密なソロ・パフォーマンスの最中に、コッコが長時間舞台上から姿を消す。しかしそれによって、未知なるものや変わり続けることへのトランスジェンダーとしての情熱が、語られなくなってしまうわけではない。自身のジェンダー・アイデンティティーをノンバイナリーとしているコッコは、自分が人の目に見えない透明な存在に思えたことや、まちがって名付けられたり見られたりしたことが強烈な体験だったと明かしている。この体験は、固有な状態を生み出す。ある種の力が与えられると同時に、抑圧的でもあるのだ。だからこそこのパフォーマンスは、コッコが姿を消すその深い意味や、すべてが消えてなくなった後に見出しうる何かについて、問うのである。

現在、多くのコンテンポラリー・シアターがパフォーマンス的な要素を疑い、代替空間（オルタナティブ・スペース）が

劇団「ヴィールス」とダンス・カンパニー「ソディアック」による『汗』 撮影：Yoshi Omori

もたらす自由を追求するなか、「ヘルシンキ・フェミニスト秘密結社（The Feminist Secret Society of Helsinki）」は新たな挑戦に乗り出した。2022年秋に発表した作品『出会い（Kohtaamisia）』では、パフォーマーの身体を他のパフォーマーが全面的に使用することを許可し、これによって、いかにしてひとりの人間が他者を表現することが可能かどうかを探求した。この作品は、使用されるふたつの身体を通して見知らぬ者同士の対話を可能にする。舞台上のパフォーマーたち（ふたつの身体）は、イヤホンとマイクをつけて、観客には見えない２人の人物とつながっている。使用されるふたつの身体――有色人種の俳優ローラ・エクランド・ナーガ（Laura Eklund Nhaga, she/her）とダンサーのソフィア・ウェケサ（Sophia Wekesa, she/her）は、他のことが言いたくなるまで、この姿の見えない人たちが発する言葉をイヤホンから聞き取り、そのまま繰り返す。居心地が悪くなるような瞬間もあるが、この体験によって観客は、自身のジェンダーや人種に対する偏見や習性に向き合うことになる。

そして、現在

世界中の他の国々と同様、フィンランドでも、劇場に客足が戻りつつある。2022年の春に規制が本格的に緩んでからは、タンペレ演劇祭（Tampere Theatre Festival）やバルティック・サークル国際演劇祭（Baltic Circle International theatre festival）などのフェスティバルが完全復活。人々は、生（なま）の舞台芸術や笑いに飢えている。他人と肩を並べて座り、見知らぬ人たちと同じ空気を吸い、生の舞台の鼓動を感じたいのだ。

Stara, Linnea

フィンランドの舞台芸術の専門組織TINFO（シアター・インフォ・フィンランド）のディレクターを務める。TINFOは、メンタリングの提供、統計調査、国内外の舞台人との提携などを通じてフィンランドの舞台芸術を促進し、海外へのプロモーションを行うと同時に、フィンランド演劇の翻訳者対象の助成も行っている。定期的に英語とフィンランド語でニュースレターを発行。

（翻訳：石川麻衣）